高齢者にとってグラウンドゴルフをする意味とは
―心理学的エスノグラフィーによる分析から―

What is the Meaning that Plays Ground Golf for the Senior Citizen?
－ From the Analysis by the Psychological Ethnograph －

中島匠郷[1]・炭谷将史・土屋裕睦[2]
Nakashima Shogo, Sumiya Masashi, Tsuchiya Hironobu

要　約

本研究は，高齢者がグラウンドゴルフをする意味について明らかにすることを目的とした。対象は，市内の公園で活動を行っている高齢者のグラウンドゴルフプレイヤーであり，調査は心理学的エスノグラフィーの手法を用いて行われた。その結果，劇学的動機論データは全部で256個，インタビューデータは全部で157個となった。それらのデータを合わせて，グラウンデッド・セオリー・アプローチを参考とした手法を用いて分析を行った結果，最終的に，【グラウンドゴルフの自由さ】，【自己の誇示】，【グラウンドゴルフに対する意味づけ】，【老いの自由さ】，【自己の存在意義の確認】，【自我の統合に向けた動き】の６つのカテゴリーグループが導き出された。カテゴリーグループ間の連関を検討し，概念図を生成した結果，そこから，「グラウンドゴルフを通じて他者と交流し，老いに直面しながら，自己の存在意義を確かめる」という仮説的知見を導き出した。

Key Words：心理学的エスノグラフィー，フィールドノーツ，劇学的動機論，老いの自由さ

Ⅰ　緒　言

近年，我が国では超高齢化社会の名が示すように，人口の高齢化が類をみない早さで進行してきている。そのため，高齢者に対する関心は，単なる高齢化対策のみならず，高齢者の属性，すなわち高齢者の一般的な心理傾向や身体的特徴等を考慮した関係形成にまで意識が向けられてきている。こうした背景の中，高齢者に対する身体的，社会的，心理的側面から更なる検討が行われているが（例えば，竹中，2006），現在では，高齢者の余暇時間の過ごし方という観点から，生涯スポーツの実施が奨励されている。

その中でも特に，グラウンドゴルフは，高齢者達の間で普及し，高齢者達によって築きあげられてきたという点で興味深く，大会の開催や用具の開発が盛んに行われていること，今後も増大すると予測される高齢者人口といった状況から更なる飛躍が期待されるスポーツである。また，実際のグラウンドゴルフの場においても，高齢者達の生き生きした表情や毎日グラウンドゴルフに参加している様子が確認され，もはやそれは彼らの生活の一部となっているとさえ感じられる状況であった。これは，グラウンドゴルフの特性や魅力が高齢者達を惹きつけているという見方

１大阪体育大学大学院　　２大阪体育大学

もできるが，高齢者のみで場が構成されているという観点から考慮するに，高齢者であるからこそ，グラウンドゴルフに求める何かがあると推察される。つまり，グラウンドゴルフをすることで保たれている心のバランスが存在したり，グラウンドゴルフを行うことによって自己の心理的課題に向き合うことができるといった高齢者の心理的体験が活動に繋がっているのではなかろうか。

グラウンドゴルフについては，「競技スポーツのような「他人と争うこと」「個人の目標達成」などではなく,「他者との交流」に楽しさがある（宮本, 2007）とされているが, 富川ほか（2007）の研究では，グラウンドゴルフをする大きな要因は「人との繋がり」としながらも，「親睦だけではない真剣勝負を展開している」といった側面が提示されている。両研究からは，他者との交流が重要な要素を占めていることは明らかにされているものの，上述したような，グラウンドゴルフをする高齢者の内的な視点に迫るには至っていない。これは，グラウンドゴルフに焦点づけられた研究が少数であることにも起因している。

本研究では，このような背景から，グラウンドゴルフの場における高齢者の心性を分析し，高齢者がグラウンドゴルフをする意味について明らかにすることを目的とした。

上述したような個々人の内的世界や意味世界を問う場合には，従来の定量的な手法ではなく，定性的な手法が適しているといえる。これについては，無籐ほか（2005）も『実際に非行少年が何を考え何を感じているのか』といった『彼（彼女）が主観的に捉えた世界』を『質的研究が対象とする』と指摘し，これまでの客観的データでは明らかにできない側面を提示している。加えて，戈木（2007）によると『現象に関しての先行研究の蓄積が少なく，変数が把握されていないときに用いられる研究手法』という指摘もあり，グラウンドゴルフに焦点づけられた研究が少なく，数例しか確認されなかったことから，仮説生成を目的とした質的アプローチが適切であると考えられた。

具体的には，グラウンドゴルフの場の様相や関係性，個人の体験の意味などを詳細に記述し，かつそれらを統合的に検討した研究が見当たらないことから，そもそもグラウンドゴルフの場がどのような場であるのかといったところから記述を行い，その場の構造や関係性といった全体像を判断材料としながら，高齢者の心的過程や価値体系について考察を深めていく。そして，最終的には，概念モデルを生成し，高齢者がグラウンドゴルフをする意味について一つの仮説的知見を導き出していく。この一連の流れは，山田（1986）が提唱したモデル構成的現場心理学，すなわち，「現場を複雑多岐の要因が連関する全体的・統合的場と定義し，A. 目的「モデル構成」のために，B. 対象の扱い「個性的現象」を，C. 研究の場「現場」で研究する心理学」を参考としている。加えて，山田は，モデル構成のためには，「多様な行動の同時的・全体的把握や，自然な文脈を含めた行動相互間の関係の把握」が重要であることについても述べており，そのような内容に即した研究方法を選択する必要性が伺えた。以上のことを踏まえた結果，本研究は，グラウンドゴルフの場という現場の質的な構造連関を，得られたデータをもとに一から構築していく探索的研究に位置づけられ，現場で観察された出来事や行為からボトムアップ的に理論を構築していくエスノグラフィーを用いた質的アプローチが有効であると推察された。

エスノグラフィーとは，『マーカスとフィッシャーによると，人類学者が異文化における日常生活を身近に観察し，記録し，それにみずから参加し，そして細部を丹念に記述しながらその文化についての話を書き上げるような，そんな調査のプロセスのことである』（佐藤，2007）と定義されている。すなわち，調査者自身がフィールド（現場）の一員となって生の出来事や営みを体験し，得られたデータを，現場の人達との関係や状況と照らし合わせながら丹念に検討を行っていく手法である。そのため，佐藤（2005）が述べるように，エスノグラフィーとは，『調査を通して，検討していくべき問題そのものの本質を明らかにした上で，具体的な一つのひとつの調査課題のあいだの関係を整理し，「構造化」していく作業』であり，当初のリサーチクエスチョンが変化したり，リサーチクエスチョンを明らかにするための分析的枠組みを構築していく手法であるといえる。

本研究では，このエスノグラフィーと類似しながらも，異なる立場に位置する心理学的エスノグラフィーを用いて調査を行う。心理学的エスノグラフィーとは，無籐ほか（2008）によると，調査のプロセスや手法は従来のエスノグラフィーと相違ないが，記述の単位が両者の間で異なっているとされている。つまり，従来のエスノグラフィーでは社会の構造や機能等を，心理学的エスノグラフィーでは，個人の心的過程や価値体系等を記述の単位としており，記述の主眼が両者で異なっているということを示している。

以上の事柄，すなわち，本研究が，現場の質的な構造連関を得られたデータをもとに一から構築していく探索的研究に位置づけられること，また従来のエスノグラフィーとは異なり，高齢者のグラウンドゴルフの場での心理的体験やその場における行為の意味等に主眼がおかれているといったことから，本研究では，心理学的エスノグラフィーを採用し，「高齢者がグラウンドゴルフをする意味とは何か」のリサーチクエスチョンのもと調査を行った。なお，本研究のリサーチクエスチョンの「グラウンドゴルフをする」は，観察者が観察可能な，グラウンドゴルフの場で生じる高齢者の言動や行動と定義づけた．具体的には，グラウンドゴルフの場に参加するだけの高齢者もそれに部類される。

Ⅱ　方　法

１．観察期間

観察期間は2008年３月から11月までであり，計17回であった。

２．調査方法

観察者自身も現場に参与する参与観察法のスタイルをとる。エスノグラフィーにおける参与観察法について柴山（2006）は，『一般にエスノグラフィーの手法における「見る」技法』が『参与観察』と呼ばれていることを指摘し，佐藤の定義を引用しながら，『現地社会の生活やその社会における活動に参加しながら行う一種の「密着取材」ないし「体験取材」的な社会調査法』としている。そこで，本研究では，柴山が述べている参与観察法を用いて調査を行い，得られた情報を毎回フィールドノーツに記録した。

3．手続き

観察初期では，倫理的な配慮を考慮して，そのグラウンドゴルフ団体の中心的な役割を担う高齢者（1人）に観察の許可を得た。それ以外の高齢者については観察者であることの身分を明かさず場に参入し，現場の人達との関係性を築いてから観察許可を得た。従来の，観察許可を得てから場に参入していくという手法では，被観察者としての意識が関与し，高齢者の会話や行動に制約が生じる可能性があるため，上記の方法を採用した。

実際の観察においては，著者がグラウンドゴルフの場に部外者として参入し，グラウンドゴルフをする高齢者達に交じりながら観察を行った。観察の最中にノートやメモを取ることが，上述したような被観察者としての意識を喚起させるため，フィールドノーツは観察後，自宅で記入を行った。また，インタビュー協力依頼が得られた場合や，一言二言の会話ではなく，長時間に渡る会話が行われたケースについては，それらをインタビューデータとして位置づけ，分析の対象とした。フィールドノーツの記入方法について，本研究では，苅田（2004）の劇学的動機論を参考にした。苅田は，劇学的動機論を，「行為者：Agent（誰が）」「場面：Scene（どこで）」「手段（もしくは道具）：Instrumentality,Agency（何を使って）」「目標：Purpose,Goal（何の目的で，何を達成しようとして）」「行為：Act（何をしたいのか）」という五つの要素（五つ組：the Pentad）を用いて，人間の行為を記述した上で理解する立場であり，前述の五つの要素から任意の二つを抽出した時にできる10組の組み合わせ（比率：the Ratio）を行為理解の視点としている点において，これまでの心理学的アプローチと比べて柔軟性・多様性がある」と述べている。本研究では，この劇学的動機論をより日常的に回帰させるため，五つの要素を，「いつ」「どこで」「誰が」「何を」「どのようにした」と設定し，グラウンドゴルフをする高齢者に関する行為をフィールドノーツに記入した。

4．分析

参与観察後に自宅で記入してきた劇学的動機論のデータとインタビューデータとを合わせて分析を行った。分析の手法は質的研究法のグラウンデット・セオリー・アプローチを参考とした方法を用いた。木下（2004）は『グラウンデッド・セオリーを一言で表現するとしたら，ひとつの調査から理論を生成する質的研究方法』と述べており，本研究が調査研究であること，またそこから一つのモデルを生成する研究であることから，その目的に合致するものと思われた。なお，具体的な手続きについては以下のように行われた。①劇学的動機論のデータやインタビューデータから得られた内容の切片化②コード名の設定③カテゴリーの生成④カテゴリーグループの生成⑤カテゴリーグループの精緻化⑥概念図の生成⑦仮説の生成である。

5．調査対象とグラウンドゴルフの場の概要

調査対象は，市内の公園で活動を行っている，ある高齢者のグラウンドゴルフ団体であった。公園は，ブランコや鉄棒などの遊具とは別に，60m ×60m四方程の多目的グラウンドがあり，活動はそのグラウンドで行われていた。グラウンドゴルフは，雨や炎天下といった天候不順を除けば毎日行われており，水曜日は朝９時から11時半まで練習試合が，水曜日以外の日は14時か

ら16時半まで，練習が行われているといった状況であった。

また，このグラウンドゴルフ団体は，同地域の者しか入れないといった会員規則や練習試合制度を設けているのもあってか，他のグラウンドゴルフの場よりもグラウンドゴルフのレベルが高い状況にあった。

調査対象となったグラウンドゴルフ団体は60名が会員となっているが，実際にグラウンドゴルフの場に来ている高齢者は16名程であった。また，年齢は均一でなく70代の者もいれば80代の者もいるといった状況であった。

６．フィールドへの参入

著者のフィールドエントリーは，A（著者が観察を行ったグラウンドゴルフの場）でグラウンドゴルフをしている，全く面識のない高齢者（以下，B と呼ぶ）に話しかけることによって始まった。半ば体当たり的な試みであったため，観察当初は B に話しかけるのをきっかけとしながらフィールドでの観察が行われた。したがって，著者が B 以外の高齢者に話しかけても不審がられたり，会話が打ち切られるといった状況が多々存在した。このように，著者のグラウンドゴルフの場における位置づけは，「場違いで怪しげな人」であった。

７．フィールド参入時における著者の内面の様相

著者は，グラウンドゴルフをする高齢者に対して先入観を持っていた。例えば，グラウンドゴルフは年寄りの暇つぶしだろうといった物の見方や，若い人（著者）に高齢者は親切なはずだという先入観を持っていた。また，観察当初にグラウンドゴルフの場の高齢者達が著者を避けていたこともあり，上手く場に溶け込んでいけるだろうか，研究として成立するのだろうかといった不安が存在していた。このように，著者のフィールド参入時における心の有り様は，高齢者に対する先入観や自分に観察ができるのだろうかといった不安であった。

８．結果の提示の仕方についての説明

本項では，結果の提示に先立ち，その結果を示す手順や結果の提示の仕方について記述を行った。参与観察法の結果を示す場合において最も留意しなければならない点は，なぜその結果が導き出されたのかという点にある。例えば，谷口（2004）は，病院内学級に参入し，「病院内学級のつなぎ援助」というこれまでにはない知見を提供しているが，観察する側の内面や視点が記述されておらず，観察の中で観察者自身がどのように感じ，どのように問いを生み出していったのかということが明らかにされていない。これらのことは，参与観察法によって得られた結果のみを提示するだけではなく，観察者が場に参与したことによる影響や観察者の心情によって左右される事象の捉え方が考慮されなければならないということを示している。この点について，西条（2008）は，『質的研究で科学性を担保するため』の一つの方法として，『構造（モデル）が得られるまでの過程（プロセス）を明示化していく』ということをあげている。

エスノグラフィーにおける参与観察では，例えば，佐藤（2006）の『カルチャーショック』や無藤ほか（2005）の『調査者の認識の変化』に代表されるように，調査者自身の視点の変化や内面の変化が存在するため，先の西条の指摘に従い，本研究では，著者の内面の変化について

も検討を行った。また，関係性の変化についても苅田（2004）が指摘しているように，「調査者が場に参入したことによる影響を考慮しなければならない」ため，この点についても検討を行った。以上のことを踏まえて，本研究では，著者が理論を構築していった過程や観察の様相を再体験できるように，①表１にカテゴリーグループが生成されるに至るまでの道筋を示し，②その後，そのカテゴリーグループについての考察を加え，③著者とグラウンドゴルフの場の高齢者達との関係の推移・著者の内面の変化を記述し，④最終的に図１の概念図について説明を行った。

Ⅲ　結果と考察

ここでは，先に述べた結果の提示順序である，①，②，③，④に従って記述を行った。また，各カテゴリーグループについて，観察された事象や語られた内容を例示しながら，考察を加えた。

１．カテゴリーグループの生成

参与観察後に自宅で記入してきた劇学的動機論のデータは全部で256個であった。また，インタビューデータは全部で157個であった。これらのデータを合わせてグラウンデット・セオリー・アプローチを用いて分析を行った結果，44項目にコード化することが可能となった。次に各コードから，［仲間意識］，［グラウンドゴルフの場の規則］，［自由な参加形態］，［自尊心の維持］，［若者に対する優越感］，［グラウンドゴルフへの自我関与］，［グラウンドゴルフに対する意味づけの変化］，［老いの拒否］，［老いの受容］，［老いの自覚］，［他者との交流の深化］，［自分らしさの確認］，［老人としての生活］，［人生の振り返り］の14個のカテゴリーを導き出し，最終的には【グラウンドゴルフの自由さ】，【自己の誇示】，【グラウンドゴルフに対する意味づけ】，【老いの自由さ】，【自己の存在意義の確認】，【自我の統合に向けた動き】の６つのカテゴリーグループを生成した（表１）。ここでは，その６つのカテゴリーグループについて説明を行った。

【グラウンドゴルフの自由さ】は，［仲間意識］，［グラウンドゴルフの場の規則］，［自由な参加形態］をまとめることで導き出された。これは，［自由な参加形態］に代表にされるように，グラウンドゴルフを開始してかなりの時間が経過したにも関わらず，途中参加が許される場の様相やグラウンドゴルフが行われているにも関わらず，「今日は散歩をしにきたんや」といった語りから読み取ることができる。他方，［グラウンドゴルフの場の規則］のように，一見すると，規則に縛られている場といった印象を喚起させるカテゴリーが存在しているが，このカテゴリーは，地域の者のみで場が構成がされるという場の仕組みを表している。したがって，グラウンドゴルフの場とは，地域の者のみしか場に参加できないという規則によって守られ，その枠組み中で個人が望む行動を自由に選択することができる特性を持つ場と解釈された。高齢者のスポーツについて，例えば，中村ほか（1998）は，ゲートボールの衰退の一因として，プレーの内容を監督から管理されるといった制度について言及しており，その他，テニス（例えば，小山，2002）などの生涯スポーツの楽しさについて言及した文献においても，自由さについて記述されたものは見当たらない。したがって，【グラウンドゴルフの自由さ】は，グラウンドゴルフ固有のものであるといえよう。

表１．カテゴリーグループ化までの流れ

コード名	カテゴリー名	カテゴリーグループ名
よそ者に対する警戒(5)	仲間意識	グラウンドゴルフの自由さ
よそ者の認め(7)		
地域の者だという自負(14)		
著者との関係の深化(44)		
グラウンドゴルフの場の規則(6)	グラウンドゴルフの場の規則	
グラウンドゴルフの場特有の言葉(26)		
自由な参加形態(15)	自由な参加形態	
気楽にグラウンドゴルフをやることのできる場(8)		
グラウンドゴルフ以外の活動の選択(35)		
他者よりも優れているという自覚(27)	自尊心の維持	自己の誇示
実力の誇示(4)		
練習しないことに対する言い訳(32)		
グラウンドゴルファーとしての自負(17)	若者に対する優越感	
若者にグラウンドゴルフは分からないだろうという優越感(2)		
若者に教えることの嬉しさ(18)		
若者に対する興味(19)		
グラウンドゴルフが好きで仕方がないという気持ち(1)	グラウンドゴルフへの自我関与	グラウンドゴルフに対する意味づけ
グラウンドゴルフに対する技術向上の期待(11)		
グラウンドゴルフへの執着(9)		
勝利へのこだわり(3)		
グラウンドゴルフが上手くいかないことによる迷い(38)		
グラウンドゴルフに執着しない様(33)	グラウンドゴルフに対する意味づけの変化	
グラウンドゴルフに対する意味づけの変化(34)		
グラウンドゴルフに対する衰えの感覚(39)		
老いに対する悲観(10)	老いの拒否	老いの自由さ
老いに対する葛藤(21)		
老いの否定(22)		
老いに伴う価値観の転換(13)	老いの受容	
老いの共有(41)		
老いの認識(23)	老いの自覚	
健康に対する意識(12)		
世代間の差の実感(24)		
人と人との繋がりの実感(25)	他者との交流の深化	自己の存在意義の確認
グラウンドゴルフに参加することの嬉しさ(16)		
グラウンドゴルフの場での個々人のふるまい方(20)	自分らしさの確認	
他者との対立(36)		
価値観の違い(31)		
生活世界の変化によってもたらされる老い(40)	老人としての生活	自我の統合に向けた動き
グラウンドゴルフ以外の生活(29)		
グラウンドゴルフを始めたきっかけ(30)		
自己を取り巻く環境(42)		
人生に対する肯定(28)	人生の振り返り	
人生の振り返り(37)		
人生に対する後悔(43)		

【自己の誇示】は，［自尊心の維持］，［若者に対する優越感］をまとめることで導き出された。ここでは，［自尊心の維持］で語られている「厚生年金満額もらっとるのは，わしを入れてこん中で6人しかいないんや」や［若者に対する優越感］の中で，著者の下手なプレーをみて，「そうやろ，簡単そうに見えてなかなか打つのは難しいんや。強く打つか弱く打つかの強弱も難しいんや」と語られている内容からも読み取ることができるように，自身が他者よりも優れた存在であるということを誇示しようとする姿勢が伺えた。つまり，グラウンドゴルフそのものを目的にするというよりは，優越感を得ることに意味を見出すと解釈された.

【グラウンドゴルフに対する意味づけ】は，［グラウンドゴルフへの自我関与］，［グラウンドゴルフに対する意味づけの変化］をまとめることで導き出された。これは，グラウンドゴルフをする高齢者がどのようにグラウンドゴルフを意味づけているのかということを示したものであり，［グラウンドゴルフへの自我関与］の，「わしはやっとるぞ。一人で来て練習しとる」や［グラウンドゴルフに対する意味づけの変化］の，「最近は，今日はグラウンドゴルフやろうと思って家を出て，道具を忘れてきてもういいやと思うことが何回もある。以前やったらそんなんなかったやろうけど」といった語りから読み取ることができる。

【老いの自由さ】は，［老いの拒否］，［老いの受容］，［老いの自覚］をまとめることで導き出された。これは，［老いの拒否］の，「あ―，老いたとかそんなのないない。今でも単車ころがしとるし，朝５時半の子供達のラジオ体操も行くし，病院にも行かない」や［老いの受容］の，「年よりは年に合わせて穏やかになってくべきなのにね」や［老いの自覚］の，「子どもはあんなに走れてええわ，わしらは年やから無理や」といった語りから読み取ることができた。これらは，ある場面では，［老いの拒否］について語り，次の瞬間には［老いの受容］について語っているといったような矛盾の中で聞かれ，グラウンドゴルフをする高齢者は，老いを１つの立ち位置に留めるという選択肢は残しながらも，様々な視点に立って老いをみつめようとすると解釈された。そこからは，立ち止まりながら老いと向き合うことも，瞬間的に老いに対する立ち位置が変わることも当人の中で矛盾なく進行し，老いがまるで自由に動いている様が見受けられたため，【老いの自由さ】と命名された。

【自己の存在意義の確認】は，［他者との交流の深化］，［自分らしさの確認］をまとめることで導き出された．ここでは，［他者との交流の深化］の「そうやな（グラウンドゴルフの集いがいろんな活動に影響してること）。わしもこうやって多くの人と関わらせて貰って良かったと思っとる」や［自分らしさの確認］の，「ホイっと（普段は打つときに何も言わないのにちゃめっ気を出して）ショットを打った」といった内容から読み取ることができるように，他者との交流を通して【自己の存在意義の確認】をしている姿が伺えた。これは，対等な他者関係の中で行われていることに特徴があった．つまり，グラウンドゴルフの能力が高いものが優位な立場を得るわけでもなく，社会的な地位の高いものが影響力を持つわけでもなく，人対人との関係の中で他者と関わり，他者を鏡としながら，自分という存在意義の確認を行っているということであった。

【自我の統合に向けた動き】は，［老人としての生活］，［人生の振り返り］をまとめることで導き

出された。ここでは，［老人としての生活］の，「特に何もやることはないな（グラウンドゴルフ以外の生活は）。帰ってテレビ見るくらいやな」や［人生の振り返り］の「お義父さんは94歳でなくなって，跡継ぎである息子にも無理をさせすぎたせいか早死にさせてしまってね。今は，わしと家内で住んで」といった語りからも読み取ることができるように，グラウンドゴルフをする高齢者も例外ではなく，高齢者という属性が基盤となっていることが伺えた。事実，グラウンドゴルフをする時間よりも高齢者としての日常生活の時間の方が圧倒的に長い状況であった。そこからは，一般的な高齢者としての，祖父・祖母という役割の中で，自身の人生を振り返りながら，自分の人生に意義を見出そうとする姿がみられた。

２．著者とグラウンドゴルフをする高齢者達との関係の推移

著者とグラウンドゴルフをする高齢者達との関係の推移をみていくと，観察当初，高齢者達から不審な人とみられ避けられていた著者が，彼らに少しずつ受け入れられていくような体験をし，最終的には著者が場の一員として認められていったという過程をみることができる。具体的には，高齢者ばかりのグラウンドゴルフの場に何で若者がいるのかという目でみられていたのが，何度も関わっていくうちに，「あんたまた来たんか」と顔を覚えてもらえるようになり，挨拶や世間話をするような関係へと変化していった。そして，最終的には，著者に自身の人生を語るようになったり，場の規則で一緒にグラウンドゴルフをすることができない著者に対して，「あそこにスティックとボールがあるから中島君も参加しいや」と著者を誘う関係にまで発展した。

３．著者の内面の変化についての説明

著者の内面の様相は，大別すると，観察者としての自己への変化と高齢者を受容していく過程に分類することができる。観察者としての自己への変化は，自分の観察結果は正しいのだろうかという不安と高齢者の人達と上手く関係が築けているのだろうかという不安から，佐藤（2005）の述べるような当事者と観察者の両方の視点をあわせ持つ『第３の視点』への変化であった。これは，場での関係性が築けたことによる安心感から視点の移行が行われた。高齢者を受容していく過程は，グラウンドゴルフをする高齢者に対して先入観をもっていた著者が，彼らと関わっていく中で，先入観をもっていた自分を反省したり，高齢者という存在を分かろうとする気持ちへの変容であった。

また，著者は上述したような心の有り様を経験しつつ，観察の焦点を変化させていった。具体的には，全ての事象が観察の対象となる観察初期（例えば，グラウンドゴルフが上手いから有能感や生きがい感を得られる，健康のためにグラウンドゴルフをやっている等の視点），老いに焦点づけた観察を行った観察中期（行動や語られる内容の多くに「老い」が介在していることに気づく），老いの自由さという明確な概念を精緻化していくための観察後期を経て行われた（リサーチクエスチョンに「老い」がどのように関わっているかの検討）。このように，著者の観察の焦点は，観察の焦点すら定まっていないところから，老いに焦点化され，最終的に，老いの自由さという概念に統一されるという過程をたどった。

４．仮説の生成

カテゴリーグループ間の連関を検討した結果，図1のような概念図が生成された。その後，概念図のカテゴリーグループやその関係性を統合的に検討し，最終的に，これらの結果から導き出された仮説を提示した。

図１は，【グラウンドゴルフの自由さ】，【自我の統合に向けた動き】のカテゴリーグループが，グラウンドゴルフの場で体感される高齢者の心の有り様，すなわち，【老いの自由さ】を介して行われる，【自己の誇示】，【グラウンドゴルフに対する意味づけ】，【自己の存在意義の確認】に繋がるということを示している。これは，高齢者の内的なペースに合わせてグラウンドゴルフに参加することができるというグラウンドゴルフの場の特性と高齢者が日々の生活を通して自分という存在を意味づけるという高齢者特有の心性によって，老いを介した自己の確認作業が行われるということを示唆している（本研究では，このグラウンドゴルフの場で体感される高齢者の心の有り様を表す言葉として，「老いの自由さを介した自己の確認作業」と名づけた）。そして，その両条件が揃った状況であるからこそ，グラウンドゴルフをする高齢者は，例えば，①【グラウンドゴルフに対する意味づけ】では，グラウンドゴルフのプレーの成否により，老いの否定や老いの自覚が生じたり，②【自己の誇示】では，自身が他者よりも優れた存在であることを誇示することで，老いの否定を行おうと試みたり，③【自己の存在意義の確認】では，他者を鏡としながら自己という存在を確認することで，老いがあるべきものとして受容され，逆に，④老いを受容しているからこそグラウンドゴルフで自己を表現する必要がなくなり，⑤老いの否定をするために自己を誇示したり，⑥老いを自覚しているからこそ，自己の存在意義を確認しようとするといえる。したがって，老いが原因となって直接的にある行為が生じるというよりは，グラウンド

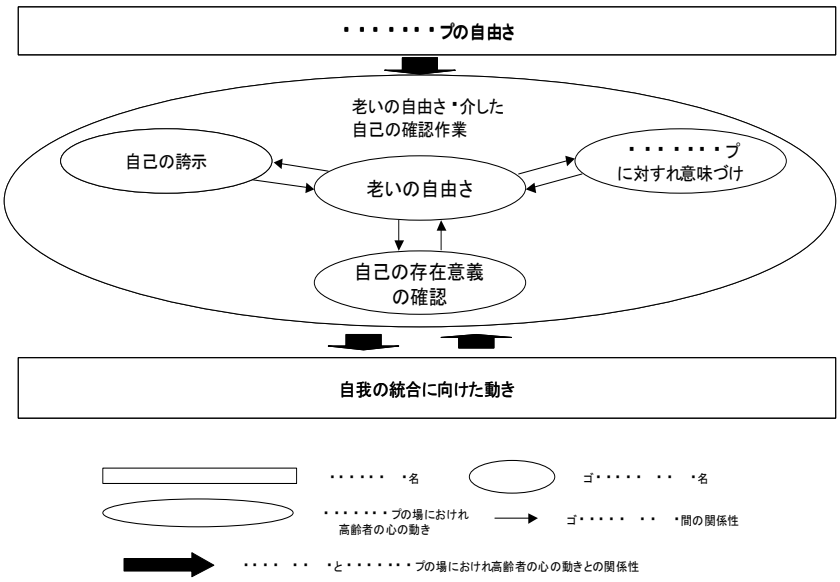

図１．グラウンドゴルフを通して行われる自己の確認作業

ゴルフをする高齢者は，自身の老いとこれら３つの心理的体験を両行することによって，あるいはその中で揺れ動くことによって，自己の確認作業を行っていると解釈できる。以上のことから，本研究では，「高齢者がグラウンドゴルフをする意味とは何か」のリサーチクエスチョンに対し，「グラウンドゴルフを通じて他者と交流し，老いに直面しながら，自己の存在意義を確かめる」という仮説的知見を導きだした。

Ⅳ　まとめと今後の課題

本研究では，「高齢者がグラウンドゴルフをする意味とは何か」のリサーチクエスチョンのもと心理学的エスノグラフィーによる調査を行い，グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析を行った．その結果,【グラウンドゴルフの自由さ】と【自我の統合に向けた動き】によって,【老いの自由さ】を介した,【自己の誇示】,【グラウンドゴルフに対する意味づけ】,【自己の存在意義の確認】が行われるといった心理構造が導き出された。

つまり，グラウンドゴルフは，①身体能力や社会的地位に優れているものが場内に影響力を持つということではなく，人対人という対等な他者関係の中で自己を誇示したり，自己の存在意義の確認ができ，②グラウンドゴルフをすることで自己を表現でき，自らの身体感覚を確認でき，③それらが様々な老いの立場との関連の中で行われるということであった。これらの事実から，グラウンドゴルフをする高齢者を理解しようとする際に,【老いの自由さ】，すなわち自己という存在を確認しながら，老いに対する立ち位置を変化させているという視点の必要性が提言できる。また,調査を通して実感したことではあるが,『老いという言葉はそれ自体に多層的な響きをもつ』（氏原ほか，2004）といえる。その意味で，本研究では老いの一側面を明らかにしたに過ぎない。今後は，老いという現象を個人そのものを揺るがす現象として，当人のこれまでの人生や生き様，老いるということに対する心の揺れ等を考慮した見方が必要であろう。

謝　辞

この調査にあたって，グラウンドゴルフの場の皆様から多くの協力を頂きました。また，聖泉論叢編集委員会の先生方からは，本論文を掲載する機会を頂きました。記して感謝申し上げます。

付　記

本論文は，2009年度聖泉大学人間学部人間心理学科に提出した卒業論文の一部を大幅に加筆修正したものである。また，この内容の一部は，2009年第60回日本体育学会で発表された。

文　献

竹中晃二編（2006）　現代のエスプリ　身体活動・運動と行動変容　始める，続ける，逆戻りを予防する．至文堂：東京，p.44-50.

宮本晋一（2007）　高齢者スポーツの持つ可能性―グラウンドゴルフの「楽しさ」を規定する社会学的要因と効果―．沖縄大学人文学部紀要，10：97-107.

富川拓・炭谷将史・多胡陽介（2007）　高齢グラウンドゴルフプレーヤーの語り（その１）．聖泉論叢，15：255-270.

山田洋子（1986）　モデル構成をめざす現場（フィールド）心理学の方法論．愛知淑徳短期大学研究紀要，25：31-50.

無籐隆　やまだようこ　南博文　麻生武　サトウタツヤ編（2005）　ワードマップ　質的心理学―創造的に活用するコツ―．新曜社：東京，p.92-93,p.164-166,p.97-98.

戈木クレイグヒル滋子（2007）　グラウンデッド・セオリー・アプローチ　理論を生み出すまで．新曜社：東京 ,p.2.

佐藤郁哉（2007）　ワードマップ　フィールドワーク増訂版　書を持って街へ出よう．新曜社：東京，p.49,p.45.

佐藤郁哉（2005）　フィールドワークの技法　問いを育てる，仮説をきたえる．新曜社：東京，P85,P,74.

柴山真琴（2006）　子どもエスノグラフィー入門　技法の基礎から活用まで．新曜社：東京，P.41.

苅田知則（2004）　なぜ子どもは「隠れる」のか？：幼稚園における自由遊びの参与観察．発達心理学研究，15（2）：140-149.

木下康仁（2004）　グラウンデッド・セオリー・アプローチ―的実証研究の再生．弘文堂：東京，p.41.

谷口明子（2004）　病院内学級における教育実践に関するエスノグラフィック・リサーチ：実践の“つなぎ”機能の発見．発達心理学研究，15（2）：172-182.

西條剛央（2008）　ライブ講義　質的研究とは何か　SCQRM アドバンス編　研究発表から論文執筆，評価，新次元の研究法まで．新曜社：東京，p.174-178.

中村本勝・市川孝夫・小林正憲（1998）　ゲートボール衰退化の要因と再起に向けての課題について，久留米工業大学研究報告22：107-112.

小山秀哉（2002）　高齢者テニスの楽しみ（特集高齢者スポーツのすすめ）体育の科学52：792-794.

氏原寛　亀口憲治　成田善弘　東山紘久　山中康裕(2004)　心理臨床大辞典(改訂版)．培風館：東京，p.1317.